みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

地縁・血縁・学縁：韓国の選挙にみる人間関係 (紀行・たより)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005848

地縁・血縁・学縁
――韓国の選挙にみる人間関係――

朝倉敏夫

昨年六月からこの三月まで、私は日本学術振興会の派遣研究者として韓国のソウルに滞在した。前回のソウル滞在は七九年から八〇年にかけてで、一二年ぶりのことであった。この間、何度かソウルを訪れてはいたが、今回は短期間の旅行とはまた違った感じで、韓国社会のこの一〇年余りの変化について考える機会をもてたように思う。

前回、私が語学研修のため初めてソウルに滞在した期間は、七九年の一〇月に朴正熙大統領が暗殺され、その翌年の春にかけては「ソウルの春」といわれ民主化の波が押し寄せようとした時期であった。当時、金泳三、金大中、金鍾泌の三氏が次期大統領と目され、民主化時代を迎えようとしていた。しかし、労働争議やデモが多発し、社会が混乱し、また政府の力が弱かったために、全斗煥国家保安司令部司令官が事実上のクーデターを行うことによって実権を握ったので、短期間のうちに終止符が打たれたのだった。

その後、八一年三月から全斗煥大統領のもとで「第五共和国」、そして八八年二月から盧泰愚大統領のもとで「第六共和国」へと引き継がれ、今日に至っている。この一〇年余の間、韓国社会は、ソウルオリンピックに代表される「国際化」、経済発展にともなう「産業化」、そして「近代化」が進み、さらにこれらをあまりに急ぎすぎたことにより社会的矛盾・病理をも経験してきているが、これとともに八七年の「民主化宣言」をはじめとして「民主化」へ向けた大きな実験が進められてきた。

そして、今年の末には新たな大統領が生まれるシナリオになっている。その間、幾度かの政党の離合集散があり、世代交代が叫ばれ、今回新たに財閥総帥の鄭周永氏などが加わったとはいえ、その登場人物としては、金鍾泌氏の支持を受けた金泳三氏と、金大中氏の二氏の出馬が再び予定されており、その意味ではあたかも一〇年前の予告編がいよいよ本編となって上映されようとしているかのようである。一〇年一昔というべきか、一〇年一日というべきか。

さて、昨年、私がソウルに着いてすぐの六月二〇日に「広域選挙」と呼ばれる道・市議会議員選挙が行われた。これは、三〇年ぶりの地方自治復活ということで、昨年三月に行われた「基礎選挙」といわれる郡、中小の都市、大都市の区の議会議員選挙に引き続くものであった。そして、帰国間際の今年の三月二四日には一四代国会議員選挙が行われた。ちょうど私の滞在期間をはさんで二つの選挙が行われたことになる。そこで前置きが長くなったが、今回の滞在記として、二つの選挙のうち、一連の過程を追うことのできた国会議員選挙について紹介し、これに関連して韓国社会について考えたことを記しておこうと思う。

まず、今年に入ってすぐに新聞・テレビなどマスコミが、年末に行われる大統領選挙の前哨戦として国会議員選挙を大々的に報じ始めた。九〇年に入り当時の民主党の金泳三総裁が政界再編成を主導し、これに共和党の金鍾泌総裁が同調し、盧泰愚大統領の率いる民正党との与野三党合併により結成された与党の民自党でも、九一年秋に金大中総裁の新民党と李基沢総裁の民主党が合併した野党の民主党でも、それぞれ公認候補を決める公薦があり、これをめぐる派閥間の争いが連日のように報道された。また財閥総帥である鄭周永氏による国民党の結成をはじめ、いくつかの新党の旗揚げ、タレント候補の海外脱出など、つぎつぎに選挙をめぐる話題がマスコミを通じて茶の間に提供された。選挙日程が決まったのは二月二一日であるが、それ以前に選挙戦はすでに大方が終わってしまっていたという感じさえした。三月一〇日に候補登録が締め切られ、それから行われる街頭での選挙戦は日本と異なり選挙カーに乗っての遊説はなく、立ち会い演説会が中心である。街では、選挙ポスターが貼られ、候補者の名を書いた横断幕がかかり、ビラが配られるなど視覚的には選挙を感じるが、演説会の行われる駅頭や校庭に自ら足を運ばなければ、選挙の喧噪はなく、日本の連呼になれてしまった私には物足りなささえ感じられた。

それでも、かつて韓国の友人が「日本人がエコノミック・アニマルなら、韓国人はポリティカル・アニマルですよ」と自嘲的に言っていたが、韓国人は政治の話が大好きである。選挙ともなれば、夕方の酒場の席ではむろん、朝「薬水（わき水）」を汲みにいく山でも、とにかく人が集まればその話で持ちきりになる。しかし、八〇年の時と比べると、当時は「これから国の政治がどうなるのか」という緊迫感を感じたが、今回は冷静に選挙戦をながめるという感じであった。それは一〇年間という歳月によって韓国社会が成熟してきたからのように私には思えた。

その中で選挙に過熱していたのは、民主化路線の中で「報道の自由」という言質をとったマスコミであった。幸い長期に滞在していると、比較的丹念に新聞を読む時間がある。いくつもの選挙報道の中で、私が興味をもったのは『韓国日報』に二月一一日から三月一日まで連載された「一四代総選激戦地帯」という記事であった。この連載は二三七選挙区の中から激戦区と予想される選挙区を三選挙区ずつ一七回にわたって選び出し、各選挙区ごとに担当記者が候補者それぞれの支持票獲得を分析するものであった。私はかつて韓国の村落社会における人間関係が選挙という場面にどのように反映しているかについて報告したことがあるが、[注] 今回も国会議員選挙という場に韓国の人間関係のネットワークがどのように反映されているかに関心があったからである。

日本では選挙に勝つのに必要とされる条件は、地盤・看板（肩書き）・カバン（お金）の「三ばん」であるというが、韓国においては地縁・血縁・学縁の「三縁」が選挙に勝つ必要条件であるという。この連載記事を通して、これら地縁・血縁・学縁が選挙にどの程度反映されているかをみていくことにしよう。

韓国では選挙に勝つには、パラム（風）が起きねばならない。このパラムが与党に向くか、野党に向くか、「時の勢い」となって大勢を決する。そしてこのパラムは政党指導者の人気に大きく依っている。金泳三氏の慶尚南道、金大中氏の全羅南道、金鍾泌氏の忠清南道など、それぞれの出身地域では彼らが大権をつかむことが大きな願いとなっている。ことに朴正熙大統領以後、全斗煥、盧泰愚と慶尚道から大統領が輩出したため地域格差が生じたとして全羅道ではこれに対する反発があり、歴代大統領の対抗馬であった金大中氏への期待が絶対的なものになっている。こうした対立は、新羅と百済の確執という歴史的要因から生じたという説もあるが、全羅道（湖南）と慶尚道（嶺南）の間にある「地域感情」は、かなり根深いものがある。

現在の韓国の行政的地域区分は伝統的な地域区分に基づき、京畿、江原、忠清北・南、慶尚北・南、全羅北・南、済州の九道と、ソウル特別市、釜山、仁川、大田、大邱、光州の五つの直轄市になっているが、この連載でも、地域別にみると、ソウルが四四選挙区中一七、慶尚北道が二一中八、京畿が三一中七が激戦区として挙げられているのに対し、全羅南道の一九、光州の六選挙区は金大中氏を代表とする野党が圧倒的に強いことが予想され、激戦区として一区も挙げられていない。

こうした地縁による結びつきは、特定の地域内だけではなく、農村から都市への人口集中がみられる中で都市においてもみられ、その選挙区にどの地域の出身者が多く居住しているかが大きな変数となってくる。連載の中からこれに関する記事を抜き出してみよう。

たとえばソウルの九老選挙区では「総有権者の過半数以上を占める湖南と忠清圏出身住民たちの地域間競争のきざしがすでに尋常ではなく感知されている状況」であるとされ、全羅道（湖南）出身の金大中氏が支援する野党候補と、忠清道出身の金鍾泌氏が支援する与党候補との競いが予想されている。

同じくソウルの道峰丙選挙区では「趙は三〇パーセントに達する湖南票と意識ある若い層の呼応を期待」、冠岳乙選挙区では「ソウルで財政自立度が最も低い（三二・六パーセント）落後した地域で、他地域に比べ湖南出身が多い（三五パーセント）野党勢が強い所である」、麻浦甲選挙区では「いわゆるタルドンネ（直訳すると「月の街」、高台にあるためそう言われる）の都市庶民層が三分の二以上を占め、湖南出身有権者の比率が三〇パーセントと比較的高い」、江東乙選挙区では「この地域が海公申翼熙先生（独立運動家・政治家）の牙城であった京畿広州から編入された地域伝統をもち、湖南出身有権者が三五パーセントと相対的に高い」といった記述がある。

京畿道でも、光明選挙区は「全体有権者の中で湖南と忠清出身がそれぞれ三〇パーセントほど占めている」、安養選挙区は「周辺に工場が多く、湖南出身が三〇パーセント程度を占めている」といった記述がある。ことに農業地帯である湖南から離村して都市に転入した出身者は、階層的にも低く、野党の支持基盤となっている。

また、一選挙区が複数の郡からなっており、それぞれの郡出身の候補が立候補する

ことにより、地域の対立が生じることもある。

たとえば、忠清北道の報恩・沃川・永同選挙区では「それぞれ民自党・民主党・国民党候補の出身の三郡が、単一選挙区にくくられている地域で、いわば『地域候補擁立』」、慶尚北道の青松・盈徳選挙区では「二人の争いは嶺南・湖南の地域対決をそのまま縮小したような青松郡と盈徳郡の自尊心の争いにまで広がっている」、また慶尚南道の宜寧・咸安選挙区では「すべて二三の邑面（郡の下位行政単位）が集まる宜寧・咸安は、『小地域感情』に便乗した郡対抗戦の様相が起こっている代表的な地域である」といった記述がある。

選挙においては地元と結びつくのは当たり前だが、地域間での行きすぎた対抗意識がみられている。

こうした地縁の争いの他に、血縁によって結ばれた集団間の争いもある。たとえば『韓国日報』の「異色熱戦地帯」という記事に、江原道において「民自党崔氏、民主党咸氏、無所属沈氏が出る江陵では、江陵崔氏、江陵咸氏、三陟沈氏など大姓を基盤にしており」という記述がみられるように、地域社会の中での氏族間の争いがある。そのうえこの選挙区では「やはり江陵崔氏である無所属の崔氏まで出馬すれば孫子行列（同じ氏族内で、祖父と孫の世代関係にあたる）である民自党の崔氏とともに『祖孫対決』が起こる」といったように、氏族内部での争いを引き起こすこともある。

韓国では「背景」という言葉をよく聞くが、たとえば「背景がよい」と言えば、力をもった人々につながっていることを意味する。こうした「背景」として、もっとも大切なのは自分が一員となっている血縁集団である。農村地域では地域やムラを単位として、その土地に定着した始祖の子孫たちによる父系集団である「門中」が存在する。門中内では世代の序列や系譜上の距離によって個人が位置づけられ、それにふさわしい行動が期待される一方、対外的には門中の成員であることが社会生活を営む上での一種の資格とみなされる。そして、有力な門中では都市においても、門中成員が共同事業、情報交換、親睦をはかるための「宗親会」を組織している。そして、次に大切なのが、同級、同期、同窓生である。韓国では教育熱が高いが、これは有名大学卒業者が優遇される学歴社会であり、これらの有名校出身者による学閥の力が強いからである。同窓生であるということで連帯感が生まれ、さらに、もともと同年集団の連帯意識が強いため、国民学校（小学校）、中学、高校、大学を問わず、同期、同級であればその結びつきはいっそう固いものになる。

こうした血縁による「宗親会」と学縁による「同窓会」が選挙戦での支持基盤となっていることを示す記事を先の連載の中から抜き出し、以下各道ごとに羅列してみよう。

慶尚北道の英陽・奉化選挙区では「金は奉城国・中同窓会、越南参戦勇士会、江陵金氏宗親会などの私組織を積極稼働している。柳は全州柳氏宗親会と契組織などを通して、……。李も真城李氏宗親会と土村国民学校同窓会などの支援を受け」、迎日・鬱陵選挙区では「李は同志商高同門会と月

城李氏宗親会など周辺組織と……。朴は一万二〇〇〇世帯に達する超大型の密陽朴氏宗親会の結束と後援の可否が最大変数として作用する展望であり」、青松・盈徳選挙区では「金は二〇〇〇世帯に達する金寧金氏宗親会と自身が会長を引き受けている達山国、盈徳中・高同窓会の声援も期待」。

慶尚南道の浦項市選挙区では「浦項高出身である李と許が母校支持を分けることを予想、朴は同知高同門たちの支持で対決するという覚悟で同窓会組織を積極稼働する計画」、蔚山市の中選挙区では「ソウル法大、京畿知事、内務部長官など華麗な学歴と経歴をもっている金は、高霊金氏宗親会長を引き受け、会員一〇〇〇余名の私組織まで稼働」、同じく南選挙区では「沈は三七〇〇余票と推算される也音沈氏宗親会など私組織も積極的に活用している」とあり、蔚山郡選挙区では「三候補が各々南部(朴)、東部(金)、西部(権)などに出身地域が分かれており、門中を基に各々排他的な勢力圏を形成しており、地域間・門中間対決まで加勢している。朴は一万五〇〇〇余票に達する密陽朴氏門中を基に」、宜寧・咸安選挙区では「鄭は本家、妻家(妻方親族)、外家(母方親族)、門中の私組織に馬山高同門会まで積極稼働中。趙は何より咸安趙氏門中を基盤に支持基盤を拡散中。前回は同じ門中から趙氏がともに出馬したせいで票が分かれたと敗因を診断、一月前に門中総会で自身に候補を単一化するのに成功、『失地回復』に自信をもっている。民主山岳会出身二五〇〇余名の組織を根幹に、咸安国校、慶南中高など同窓会と、同甲契、農友会、婦人会など私組織までフル稼働し……。姜は特に宣寧姜氏門中の支持を基盤に」。

全羅北道の全州・完山選挙区では「李は六〇〇〇余世帯に達する全州李氏宗親と、井州、高敞など縁故地郷友会の助けも期待」、群山選挙区では「姜は中央国校、群山中・高を卒業し、この地域に深い根があることを強調しつつ、地域社会の主軸をなしている群山高同門層を掘り起こしている。蔡は平康蔡氏宗親会、群山高二回同期生など後援組織の助けも期待。申も平山申氏宗親および群山師範同門たちの声援も」、扶安選挙区では「高は五〇〇余世帯の済州高氏宗親、全州師範同門と各界の軍出身人士が心強い背景。李は扶安面ドアン国校と裡里中、全北大同門会の支援を期待しており、一〇〇〇余世帯の全州李氏宗親たちも支持基盤の一つ」、沃溝選挙区では「元は聖山面が故郷で二八〇余世帯の宗親たちはもちろん群山高、全北大同門たちも心強い支持基盤。姜は晋州姜氏宗親たちが『絶対的後援』を約束し、この地域の教育界元老である伯氏姜禮善大野国校校長の数多くの弟子たちも『大切な資産』」。

済州道の済州市選挙区では「済州道は他地域に比べ、小地域間、門中間の排他的感情が強く、出身政党よりは人物本位で投票する。高は莫大な資金力と高氏宗親会組織を十分に活用。梁は梁氏宗親会と済州一高人脈を基盤に」とある。

「宗親会」と「同窓会」の記述を抜き出してみたが、およそ全国各選挙区において得票支持基盤として機能しており、しかもこれは郡部や中小都市に限らず大都市においてもみられる。

ソウルにおいても、龍山選挙区では「奉は自身が卒業した景福高・延世大出身たち

の集まりである『延福会』を中心とした私組織の活発な支援を受けている」、江南乙選挙区では「金は学縁（慶北中高）と夫人の京畿女高・ソウル音大同窓組織など二〇余の私組織を編成し青年・女性層を攻略中である」、江東乙選挙区では「張は湖南郷友会のみならず中東高・東国大同門会、仁同張氏宗親会など私組織を中心に支持の拡大を指図。鄭はソウル大・京畿高同門会と河東鄭氏宗親会など私組織を通して支持基盤を広げ」、松坡乙選挙区では「高はこの地域最大学脈である一新女中高・蚕室女高財団の講師である関係で学父兄たちが自願奉仕隊に出ており、明城教会執事として三〇〇〇世帯に及ぶ信徒たちの支持拡散に大きな期待をかけており、湖南出身（井邑）として民主党側の離脱票を集中攻略」といった記述がある。

このほか、仁川直轄市の中・東選挙区では「愼は名門である仁川中・財物浦高同門たちの強力な支援」とあり、釜山直轄市の影島選挙区でも「金は金海金氏宗親と学縁・地縁も主要票田」、大田直轄市の中選挙区でも「姜は地域内の三〇〇〇世帯ほどの晋州姜氏宗親会にも期待」とある。

選挙戦においては、「宗親会」「同窓会」以外にもこの記事にもあるように、軍人会、教会、山岳会、「契（伝統的な相互扶助組織）」といったさまざまな「私組織」が機能している。このほかにも早起き蹴球会、老人亭など、韓国社会にあるありとあらゆる団体を通して集票活動が行われているが、これらの中でも、やはり「宗親会」と「同窓会」が二つの大きな柱となっている。国民学校、中学、高校、大学とすべての同窓会組織が稼働すれば相当に大きな力になりうるし、また大きな門中の宗親会では一万票を越える基礎票をもっており、ともに決して無視できない支持基盤となっている。

この連載記事に提示されたのは、選挙において候補者がどのような形で票を期待しているかであり、実際の選挙戦でどのように地縁・血縁・学縁が投票行為に反映されたかは、投票結果を詳細に分析しなければわからない。しかし、韓国社会の人間関係のネットワーク、なかでも地縁・血縁・学縁が選挙という場にいかに強く顕在しているかを知ることはできたと思う。しかも、これは国会議員選挙であり、選挙区の範囲がこれより狭い地方議員選挙ではさらにこうした「縁」が錯綜し、投票にまで直接的に影響しているにちがいない。

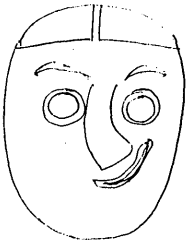
そして三月二四日、投票が行われた。この日は休日となり、翌日にはすべて開票された。その結果、投票率は七一・九パーセントと国会議員選挙としては史上最低であったが、棄権も一つの意思表示であり、この選挙戦について有権者はややさめたとでもいうか、冷静な判断があったとみることができよう。当選者の内訳は、全二九九議席（うち比例代表による配分六二議席）で民自党一四九議席、民主党九七、国民党三一、新政党一、無所属二一であった。政党別の得票率をみる限りでは、与党の民自党が国民党と与党系の公薦漏れを中心にした無所属に票を食われ敗北したといえよう。その敗因はいろいろ挙げられるが、基本的には大統領中心制の下での権力牽制の意味で、議会政治には野党性を期待するという有権者のバランス感覚が作用したといえよ

う。

地域的には民自党が慶尚道、民主党が全羅道という従来からの地盤で強みを発揮したが、国民党が京畿道、江原道、忠清道などで、また無所属が慶尚道でと、民自党の地盤でかなり票をとった。さらに民主党の牙城であった全羅道で民自党が二議席を確保、また民主党が忠清道で議席を獲得するなど、八五年の一二代、八八年の一三代国会議員選挙でみられた地域主義の深刻な対立状況からは脱却していく気配もみられた。

マスコミの中には今回の選挙についても相変わらず金権腐敗選挙との批判もあったが、国民の間にはかつての不正選挙というイメージから選挙システムに対する信頼の定着へという転換がみられている。また政治の民主化は地縁・血縁・学縁といった「縁」の選挙からの脱皮から始まるという声があるが、構造化された韓国社会の人間関係が一朝一夕に変わるはずもなく、こうした縁の中から自由にどれを選択して投票するかということが民主化への第一歩なのだろう。今年になって行われた二回の地方選挙や今回の選挙のあり方をみながらこの一〇年間を振り返ると、韓国社会は政界の再編成、経済の浮沈と景気の好不況、労働問題、社会秩序の混乱による社会病理的事件などさまざまな紆余曲折を経験しつつも、国民の政治意識の高まりとともに政治の民主化は確かに進められていると思った。そして年末には、いよいよ大統領選挙がひかえている。

注

朝倉敏夫「全羅南道都草島調査予備報告(4)——"chib-an"選挙にみる農村社会の一面——」『明治大学大学院紀要　二一集』一九八四年

（第四研究部）